

スマートキャンプ株式会社

contents

1. 働き方の非効率を減らすために良質なテクノロジーを提供する
2. 業務拡大による増員を見込んで取り壊し予定のビルに入居していた
3. 駅からのアクセスの良さ、適正な広さと賃料。そんな条件に合致したオフィスビルを探した
4. 新オフィスのコンセプトは時間の流れを感じられるキャンプ場
5. 移転によりコミュニケーションの活性化に成功。今後の改善点はその都度柔軟に対応していく



入口



スマートキャンプ株式会社
取締役 CFO
峰島 侑也氏



スマートキャンプ株式会社
Business Development Div.
Design Team Leader
森重 湧太氏



スマートキャンプ株式会社
Corporate Strategy Div.
Corporate IT
菊地 桂太氏

国内最大級のクラウドサービスのプラットフォーム「BOXIL (ボクシル)」を運営するスマートキャンプ株式会社。法人向けの多様なSaaS[※]を無料で比較・検討、資料請求までを可能とするサービスで、企業の業務効率化をサポートする。近年のSaaS需要の高まりに比例して人材採用も活発に。それに伴い2019年6月に大規模なオフィス移転を実施した。今回はそのコンセプトとこだわりを持って構築したオフィスデザインについてお話を伺った。

※SaaS: 従来のように利用者がパソコン内のアプリケーションを使用するのではなく、提供者が管理するアプリケーションをネットワーク上で使用する仕組みのこと

新オフィスのコンセプトは「キャンプ場」。 時間の流れを感じさせる オフィスを構築した

1 働き方の非効率を減らすために 良質なテクノロジーを提供する

近い将来、労働人口の減少による経済成長の低下が目に見えている。その対策の鍵となるのが非効率な働き方の改善といわれる。その実現のためには良質なテクノロジーの活用が欠かせないと考え、スマートキャンプ株式会社が設立された。設立当初は資料作成代行サービス「SKET」の運用が主業務であったが、2015年4月に営業資料掲載サイト「BOXIL」をリリース。そして9月に「BOXIL」をSaaS比較サイトに方向転換し、現在の主力業務のベースを築いた。

現在、「BOXIL」は3種に分類して運営されている。「BOXIL SaaS」は法人向けSaaSの無料比較・資料請求を行うもの、「BOXIL STORE」はSaaSのオンラインストア、「BOXIL HR」は人事担当者向けの専門情報を集めたメディアとなる。「BOXIL」上では、国内外の多様なクラウドサービスをカテゴリ別に分類。画面サンプルや仕様の比較、サービス導入企業からのリアルなレビューなどを詳細に掲載している。レビュー数は実に1万件以上。それがSaaSの比較サイトで国内最大級と言われる所以だ。

「情報を入れる『BOX』+情報を『知る』の造語で『BOXIL』と名付けました。そのビジョンは創業当時から何も変わっていません。『大きなビジネスをするのに、ヒト、モノ、カネの数や大きさは関係のないこと。少人数でも世の中を変えることができる』。その思いをキャッチフレーズにしたものが『Small Company, Big Business.』です。私どもはまだまだ発展途上の会社にすぎません。ですから順次テクノロジーを進化させていき、少しでも社会の非効率を減らしていきたいと思っています」(峰島氏)

2 業務拡大による増員を見込んで 取り壊し予定のビルに入居していた

旧オフィスはJR田町駅近くに立地していたオフィスビル。120坪を借りていた。入居当時の社員は20名程度であっ

たため余裕のある使い方をしていたが、入居からわずか1年半で60名に増加。突発的に人員が増えることは想定していたこともあって、あえて取り壊し予定のオフィスビルに入居していたという。

「我々のようなベンチャー企業にありがちな急激な人員の増減に無駄なく対応するためにはそうする方法がベストだと考えたのです。また、取り壊し予定のビルでしたら比較的割安な賃料条件で入居できますし、原状回復義務もありませんのでコストメリットも大きいですね」(峰島氏)

2018年8月、オフィスが手狭になってきたこともあり峰島氏を中心とした移転プロジェクトチームが発足する。旧オフィスであるJR田町駅周辺を希望していたものの空室が少ないことから想定していたエリアよりも少し範囲を広げて移転先を探した。

「田町駅周辺という立地にはこだわりました。当社社員の平均年齢は約28歳。単身者が多く、田町周辺に住んでいる人が半数以上を占めていました。そんな社員の通勤事情も考慮してのことです」(峰島氏)

そうして田町駅を中心に現状よりも広い面積を求め。最終的に見学したオフィスビルは10棟を超えたという。

3 駅からのアクセスの良さ、適正な広さと賃料。 そんな条件に合致したオフィスビルを探した

「移転に際しては立地、面積以外に、賃料も重要な優先条件としました。ランニングコストはできるだけ抑えたかったです。あとは駅からのアクセスにもこだわりました。単純に最寄り駅から要する時間だけでなく、ビルの分かりやすさ、途中までの横断歩道の数なども検討材料に加えしました。今後は採用活動もより活発になると想定して、応募者が少しでもスムーズに到着できる方がいいと。それだけでも会社のイメージが変わると考えたのです」(峰島氏)

また、社員同士のコミュニケーションや業務効率を考慮して1フロアに集約できるオフィスも希望条件の一つとした。「最初は全ての希望条件を叶えるのは無理があるかなと。あ

る程度の妥協も必要かと思っていたのですが、タイミングよく現在のオフィスを紹介いただきました。交通アクセスとしては今まで同様にJR田町駅が最寄り駅となり、使用面積も250坪。ここまでの広さがあればスペースを気にせずに採用活動を行うことができます。さらに賃料条件も想定内で。ここまで希望条件に合致した物件ですから逃すわけにはいきません。すぐに契約の準備を進めました。それが2018年12月のことです」(峰島氏)

4 新オフィスのコンセプトは 時間の流れを感じられるキャンプ場

新オフィスのコンセプトづくりの段階で、同社の各種デザインを担当している森重湧太氏に加わる。ちなみに森重氏は、ビジネス書の分野でロングセラーとなっている『一生使える見やすい資料のデザイン入門』の著者でもある。

「オフィスデザインは前回のオフィスづくりでお世話になった株式会社ドラフトさんに引き続き依頼しました。デザインイメージを感覚的にお伝えしただけでそのイメージに合わせた提案をしていただける。そんなところが気に入っています」(森重氏)

新オフィスのコンセプトは「時間の流れを感じるキャンプ場」。社名でもある「キャンプ」をオフィスに採り入れた。旧オフィスのデザインコンセプトが「田町らしさ」であったので、大きく変化することになる。

「キャンプ場では、そこにいる人たちが一つのチームとなって炊事やテントの設営などをします。そのチームワークによって結果を出す、加えてコミュニケーションが自然に生まれるイメージ。そういった行動を新しいオフィスに求めたのです」(峰島氏)

「最初に時間をかけてコンセプトを明確にし、プロジェクトメンバー全員で共有したことが良かったのでしょう。途中でブレることもなくスムーズに進行できました」(森重氏)

情報システム部門を担当したのは菊地桂太氏だ。ネットワーク、音響、設備面の専門家である。入社して間もなかったが、前職で移転プロジェクトを経験していたこともあり、内装工事業者の選定から現場でのチェック、業者とのやりとりまで行った。

「2019年1月に工事が始まり6月には完成というスピードでした。居抜きで入居したためそのまま流用した部分はありますが、壁、天井など主要部分は全て廃棄。新たなオフィスをつくりあげました。新オフィスの特長の一つとして大きなモニターで札幌オフィスとテレビカメラで接続したことです。いつでもミーティングを行えるというメリットのほか、拠点を含めて一つの会社という一体感を生み出すことができました」(菊地氏)

それでは新オフィスの特長な機能やデザインを紹介していこう。

エントランスは、キャンプのスタート地点というイメージを表現した。その名称は「ガレージ」とした。エントランス右側に広がるのは野外広場に見立てた「キャンパススペース」。全社ミーティングやソロワークといった業務以外に休憩、ランチなど多目的で使用される。時には最大60名を収容するイベント会場として、社外関係者が集まるコミュニケーションスペースとなる。中央にはコーヒーマシンやウォーターサーバーを配置させ、社員同士が偶発的に顔を合わせるような動線の工夫をしている。

お客様向けのセミナーは週に数回行われるため、都度セミナールームを借りる手間、コストが大幅に削減できた。そのほか、新たな試みとしてバーカウンターやビールサーバーを置いて終業後に無料で飲めるようにした。並行して業務終了後に各種社内イベントを企画。会社としての一体感が増しているという。

「色々なイベントを通じて異なる部署間とのコミュニケーションが活発になればと思っています。移転後の様子を見てみると普通にすれ違っただけで会話が生まれていることが多くなったと感じています」(峰島氏)

「時間の流れを感じる空間」をテーマにした会議室は11室用意した。部屋ごとのデザインも時間の流れを表現している。「会議室はエントランスから時計回りに「AM7」から始まり「PM5」までの名前を付けました。「AM7」の部屋は朝焼けのイメージで壁の色を青に、「PM5」の部屋は夕方を表すオレンジ色を壁の色にするなど、細部にこだわりましたね」(森重氏)

新オフィスでは2人用の小さな会議室を増やした。「旧オフィスでの使用状況を分析した結果、4人部屋を2名で使用するシーンが多かったのです。ミーティング自体はなるべくオープンスペースで行っていますが、採用面接や守秘的な内容の会議もありますので」(菊地氏)

「会議室の空きを待って会議自体を遅らせることほど非効率なことはありません。そのため多めに会議室のキャパシティを保持することにしました」(峰島氏)

実際に新オフィスの運用を見ていると小会議室の利用頻度は高いという。

同社の組織は、開発事業、メディア事業、営業、コンサルティング事業で構成されている。多様に配置された部署同士のコミュニケーションを考えて、各部署の座席を中央に集めた。

「執務室に足を踏み入れてから自席に着くまでのルートを考え



大会議室



セミナースペース



キャンプ全景



小会議室



バーカウンター

て配置しました。少しでも社員同士が交差するように。執務室の中にはコミュニケーションを高めるためにつくったエリアもあります」(森重氏)

新たにスタンディングデスクも採用した。長時間に渡って集中作業を行うエンジニアの健康を考えてのことだが、今では10分程度のミーティングが頻繁に行われているという。

また、実際のキャンプ用品を一部のオフィス家具、什器として使用している。全体のデザインとコストのバランスを考えながら採用していった。

5 移転によりコミュニケーションの 活性化に成功。 今後の改善点はその都度柔軟に 対応していく

オフィス移転後に満足度調査は特に実施していない。しかし社員の顔を見ているだけで満足度が高まっているのを感じるという。

「座席と座席の通路幅も余裕を持たせています。旧オフィスとの比較だけでなく、転職で入社された方からも以前の会社よりも働きやすいと評判を聞きます」(菊地氏)

「コンセプト通りに、社員だけでなく来社されたお客様にもキャンプ場に来たような空気感を感じてもらえれば嬉しいです」(森重氏)

今後のオフィス運用であるが、社員からの改善要求があれば迅速に伝えていく考えだ。

「もちろん何でも受け入れるのではなく経営的な判断は必要です。しかしそこに必然性が感じられたらスピード感を大事にして改善していきます」(峰島氏)



中会議室



スタンディングデスク



執務室